

令和 6 年 5 月 23 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K13025

研究課題名(和文) pair-Mergeに関する理論的および実証的研究

研究課題名(英文) Theoretical and empirical research on pair-Merge

研究代表者

大塚 知昇 (Osuka, Tomonori)

九州大学・言語文化研究院・准教授

研究者番号：20757273

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：研究期間の三年間にわたり、口頭発表3件(内国際学会を1件含む)、シンポジウム企画1件、論文3本(内1本は査読付き全国紙、またプロシーディングスも含む)、著書1冊を発表した。新型コロナウイルスの流行に伴い、一部出張等の制限がかかったとはいえ、オンラインへの切り替えを活用することにより、基本的には当初計画していた通りの予定で研究を進めることができたと考えます。そして繰り返しになるが、本研究課題のもとに全編英文の著書1冊の出版につながったことは非常に意義深い事であったと考えます。以上のことから、本研究課題は概ね良好な形で遂行することができたと考えます。

研究成果の学術的意義や社会的意義

生成文法ミニマリストプログラムでは、統語構成素を構築するプロセスである併合(Merge)操作に興味関心が集まっていた。しかしながら、近年の併合に関する研究は集合併合(set-Merge)と呼ばれる、主として項構造等を構築する際に使用される操作の研究が主流であり、付加詞要素を派生に導入する対併合(pair-Merge)の研究はあまり盛んではなかった。付加詞が人類言語に普遍的に存在する以上、その振る舞いを説明するためのシステムは非常に重要であり、本研究はその点を明らかにするために行ったものである。

研究成果の概要(英文)：Over the three years of research, I gave three oral presentations (including one at an international conference), organized one symposium, published three articles (including one in a peer-reviewed national journal and one in proceedings), and authored one book. Even though some travel and other activities were restricted due to the outbreak of the new coronavirus, I believe that I was able to proceed with the research basically on schedule as originally planned by taking advantage of the switch to online access. Furthermore, the fact that this research project led to the publication of a book in English is very significant. In light of the above, we believe that this research project was generally carried out in a favorable manner.

研究分野：英語学、生成文法ミニマリストプログラム

キーワード：pair-Merge 生成文法 ミニマリストプログラム ラベル理論 フェイズ理論 Free Merger

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

生成文法ミニマリストプログラムでは、統語構成素を構築するプロセスである併合(Merge)操作に興味関心が集まっていた。しかしながら、近年の併合に関する研究は集合併合(set-Merge)と呼ばれる、主として項構造等を構築する際に使用される操作の研究が主流であり、付加詞要素を派生に導入する対併合(pair-Merge)の研究はあまり盛んではなかった。付加詞が人類言語に普遍的に存在する以上、その振る舞いを説明するためのシステムは非常に重要であり、研究の必要があった。

2. 研究の目的

本研究の目標は、生成文法 Minimalist Program における現在最新の Phase 理論の枠組みのもと、pair-Merge は独立した操作として存在し、Free Merger に組み込まれると主張し、枠組のさらなる発展に貢献することである。本研究の主張のもとでは、Free Merger に関し、set-Merge と pair-Merge の二種類の Merge 操作と、さらにそれぞれの External/Internal の下位分類が導かれ、構造構築の上で論理的に四種類の操作の可能性が生まれる。この論理的可能性と、素性照合や label 付けといった近年の Phase 理論における一般的な想定を組み合わせることで、付加詞的なふるまいを見せる項や、項的なふるまいを見せる付加詞を特殊な想定なしに説明することができ、Phase 理論の説明力を大幅に強化することにつながると予想される。

3. 研究の方法

本研究は、理論的目標と経験的目標、二つの観点から進めた。

まず理論的目標として、pair-Merge がそもそものような操作であるのか、つまりそのメカニズムを明らかにする必要があった。このためにも、日本における Minimalist Program の理論研究の先駆者の一人といえる慶應義塾大学北原久嗣教授が主催する「慶應言語コロキウム」を代表とし、各地の理論に特化した研究会に定期的に参加し、議論を重ねた。

経験的目標としては、諸言語現象を通言語的に調査し、先行研究において十分な説明が得られていない現象を、pair-Merge を用いて説明することを目指した。本研究では、Free Merger に set-Merge だけでなく pair-Merge も加え、両者それぞれの External/Internal の下位分類も考慮すると、統語構造の構築には 2×2、External/Internal set-/pair-Merge の四種類の操作の可能性が導かれると想定する。この四種類の操作と、素性照合や Labeling といった一般的な想定を組み合わせることで、伝統的になされてきた「項要素 = set-Merge」「付加要素 = pair-Merge」という暗黙の前提はもはや不要となり、その結果として、pair-Merge した項要素や set-Merge した付加要素、つまり付加詞的な項や、項的な付加詞を枠組みとして導けることにより、先行研究では十分な説明が得られていない、非常に周辺的な言語現象に対して説明の可能性が得られることを導き出した。

4. 研究成果

令和3年度の研究では、日本英文学会九州支部第74回大会において、文左周辺部の分析を pair-Merge の観点から導き出す試みを行った。本研究は Proceedings にもまとめられた。

令和4年度においては、まず論文一本が日本英語学会の発行する English Linguistics に掲載決定した。本研究は本科研費の研究課題である pair-Merge について、特に先行研究であまり議論されていない Internal pair-Merge の詳細を議論したものであり、生成文法研究において理論的に有意義なものであると考える。また掲載誌である English Linguistics は日本における生成文法研究者の間では最高峰といっても過言ではない扱いを受けており、ここに掲載されるということは分野において一定の評価を得たとみてよいと考えられる。さらに当該論文は英語論文であることから、国内のみならず国際的にも研究内容を発信することにつながったと考える。次に口頭発表に関しては、日本英文学会第94回大会においてシンポジウム企画を行い、司会者及び発表者として登壇した。本シンポジウムにおける発表内容は、本研究課題の pair-Merge についての考察に加え、これを別のメカニズムから導き出すことができないかという、本課題を終了した後の研究方向の可能性についても検証を行ったものである。全国学会のシンポジウムであるため、情報発信において非常に有益な機会であったと考える。また日本英文学会東北支部第77回大会においても共同発表として口頭発表を行い、情報発信に努めた。

最終年度では、まず5月に、日本英語学会が開催する春季国際フォーラムにおいて、本研究課題が一部関連する内容として、東京理科大学の菅野悟准教授、藤田医科大学の近藤亮一准教授、中

部大学の田中祐太講師との共同発表で口頭発表を行った。また本発表をもとに、日本英語学会が発行する査読付きの学術誌 JELS に同タイトルの論文が掲載され、2月に公開された。さらに特筆すべきは、2023年末に、これまでの研究結果をすべてまとめた形として、著書「Radical Free Merger」を、九州大学出版会より出版した。本書は全195ページですべて英文で執筆しており、研究期間中に全編英文の著書1冊を出版したという点は非常に意義のあることであったと考える。

研究期間の三年間にわたり、口頭発表3件（内国際学会を1件含む）、シンポジウム企画1件、論文3本（内1本は査読付き全国紙、またプロシーディングズも含む）、著書1冊を発表した。新型コロナウイルスの流行に伴い、一部出張等の制限がかかったとはいえ、オンラインへの切り替えを活用することにより、基本的には当初計画していた通りの予定で研究を進めることができたと考える。そして繰り返しになるが、本研究課題のもとに全編英文の著書1冊の出版につながったことは非常に意義深い事であったと考える。以上のことから、本研究課題は概ね良好な形で遂行することができたと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Tomonori Otsuka	4. 巻 39
2. 論文標題 On Internal pair-Merge and Ambiguous Chains	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 English Linguistics	6. 最初と最後の頁 157-190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大塚知昇	4. 巻 N/A
2. 論文標題 簡素化左周辺部再考 焦点化、V2現象の観点から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本英文学会九州支部第74回大会Proceedings	6. 最初と最後の頁 3, 4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大塚知昇
2. 発表標題 pair-MergeとFORMSEQUENCE
3. 学会等名 日本英文学会第94回大会シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 菅野悟、田中祐太、大塚知昇、近藤亮一
2. 発表標題 ラベル理論における主要部の(不)可視性と移動の随意性
3. 学会等名 日本英文学会東北支部第77回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大塚知昇
2. 発表標題 簡素化左周辺部再考 焦点化、V2現象の観点から
3. 学会等名 日本英文学会九州支部第74回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Satoru Kanno, Tomonori Otsuka, Ryoichi Kondo, Yuta Tanaka
2. 発表標題 The Overt Focus Movement to vP Periphery in English
3. 学会等名 ELSJ Spring Forum 16
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Tomonori Otsuka	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Kyushu University Press	5. 総ページ数 195
3. 書名 Radical Free Merger	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------